

□海外文献紹介□

食道癌および食道胃接合部癌の患者の生存率に関して放射線学的および細胞学的に評価した遠隔転移の影響

Influence of radiologically and cytologically assessed distant metastases on the survival of patients with esophageal and gastroesophageal junction carcinoma: *van Overhagen H, et al* (Cancer 72: 25-31, 1993)

食道癌と食道胃接合部癌で遠隔転移を伴っていると、切除後、生存率は低下するとの報告がある。今回、遠隔転移の有無および外科適応の有無と生存率について検討した。

対象は、1989年1月から1990年12月までの135人の患者。年齢は40歳(平均63歳)。CTあるいはUSにより、62人に遠隔転移の疑いがあり、73人には認めなかった。62人のうち、33人はUSガイド下針生検により転移を認めた。外科適応は91人で、44人には適応がなかった。44人のうち32人は生検にて転移を認めたためであり、12人は全身状態がよくなかったためである。

放射線(CT, US)学的に遠隔転移の疑いがあった患者の2年生存率は11.2%、遠隔転移を認めなかった患者の生存率は44.3%。生検にて遠隔転移を認めた場合は3%、放射線学的に転移の疑いはあるが、生検で

めなかった場合には21.1%であった。また、外科的適応があった91人に関して、開腹術を施行した14人の2年生存率は0%だった。経裂孔的食道切除術を施行した77人のうち、放射線学的に転移を認めた場合の生存率は31.0%であり、認めなかった場合には52.1%、生検にて転移を認めた場合は0%であり、認めなかった場合には53.9%であった。

以上の結果から、生検にて遠隔転移を認めた場合には外科適応はないが、放射線学的に遠隔転移を認めたからといって手術を除外すべきではない。

(愛知県がんセンター消化器内科

小野 博美 抄)